第6回　國分功一郎『中動態の世界』ゼミ　第6章　意志と選択　　2020年6月27日　大谷

1　むしろ、ようやく始まる

「絶対的始まりとしての意志」であり「純粋な始まりではない選択」とは区別されるアレントの意志の定義では、カツアゲのような非自発的同意をうまく位置づけられない。一方でフーコーの権力論は、

> 権力を行使するものは権力によって相手に行為をさせているのだから、行為のプロセスの外にいる。これは中動性に対立する意味での能動性に該当する。権力によって行為させられる側は、行為のプロセスの内にいるのだから中動的である。［151］

と中動的なパースペクティヴをもち、非自発的同意を位置づけられる、という前章は流れだった。ただ、この流れは、非常にわかりやすい反面、違和感が残る。例えば、

> 「昼食にはラーメンを食べたいが、友達がソバにしようというので仕方なくソバにする」。
> 「子どもが泣きわめくので仕方なくお菓子を買ってやる」。
> 「給料がほしいので仕方なく働く」。
> 「銃身を突きつけられたので仕方なく便所掃除をする」。［156］

この4つの例がいずれも「仕方なく」＝非自発的同意として同一視される。しかし、これらの例を〈意志というものについての議論の延長上に置かれたものとして〉「同じだ」と片付けてしまうことに不十分さは無いだろうか。常識的に考えればすぐにわかるように、現実にあるどのような「自分の意志によって為した事柄」「自己決定とされてきた事柄」も、このレイヤーの話であれば「非自発的同意」とせざるを得ない。要するに意志によって為したとされる行為はすべて非自発的同意ということになる。意志というものに意味づけられていた様々な様相はすべて「非自発的かつ同意」という一点に集約されてしまっている。意志というものが持っていた多くの自由度が失われている。これで議論が済むのであれば、言語やその歴史との関係を見てきた意味はどこにあるのだろうか。あらゆる「自発的行為」を「仕方なく」でひとくくりにしてしまえる程度の言語観によって意志についての議論が出来てしまうのであれば、古代ギリシャ語の文法を細かく検討する必要はあるのだろうか。「人間とは何か」と始めた議論が「人間など存在しない。存在するのは素粒子だけだ」と乱暴に縮退させられたような違和感がある。本書が提示しようとしている「中動態の世界」は「仕方なさの世界」「非自発的同意の世界」という理解でいいのか。我々が「意志」や「責任」と呼んできたものは、中動態の世界においては、本当に、単に存在しない（しなかった）のだろうか。もちろん國分の議論はこれで終わるはずがない。実は始まってさえいないことが第一章で予告されていた。

> スピノザの考察は「自由意志の否定」をもって終わるのではない。スピノザは、にもかかわらずなぜわれわれは、「行為は意志を原因とする」と思ってしまうのか、と問うことを怠らない。［30-31］

ハンナ・アレントも指摘するように「スピノザは自由意志の不可能性がどれだけ認識されようとも、意志は効果としては残ると考えていた」[32]。つまり、むしろここから「中動態が生き残っている世界、中動態の世界とはいかなるものか？[38]」がようやく問われる。僕の読者としての前章への違和感は、國分には想定内であったのだろうか。

2　意志、三度……

アレントやフーコーの議論の検討がどこか空中戦を思わせたのに対し「言語の歴史」と第された本章は再び地上（言語という前提）に戻ってきた感がある。前章で争われ、存在意義を失っていた「意志」は、出来事の描写から行為の帰属へと言語が移行することで、

> その帰属先として要求するのが意志に他ならない[176]

とあっさりと再定義される。アレントの「絶対的な始まりとしての意志」ではなく、言語の歴史から定義しなおすことで、第三章終わりの、

> すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない[97]

という基本路線に接続し直されている。必要性はあったとしても、前章は実は壮大な回り道だったのではないかという気分になる。（2020年6月26日追記、後述）

3　細江論文

細江は中動態を再帰性としてとらえる。これはたしかに「明快でコンパクトな整理」。斬新。

表1　反照、受動、自動の法則

語	分類	英語	日本語
namati	能動態1	he bends	彼は曲げる
namate	中動態（再帰）	he bens himself	彼は自らを曲げる
namate	自動詞	he bows	彼はかがむ
namate	受動態	he is bent	彼は曲げられている（曲がっている）

表2　反照、使役、他動の法則

語	分類	英語	日本語
ティノー	能動態1	pay a penalty	（行為などの）報いを受ける
ティノマイ	中動態（再帰）	make another pay a penalty	（自分のために）報いを受けさせる

ティノマイ	他動詞	punish	罰する

表3　受動、使役の法則

語	分類	英語	日本語
ケイロー	能動態1	cut	切る
ケイロマイ	受動	I have my hair cut	髪を切られた
ティノマイ	使役	I have my hair cut	髪を切らせた

4　分類から度合いへ、自然の勢い

さらに、衝撃的なのは「力の度合いによって中動態は区分される」[187]だ。

> 主語が座となる過程を表す中動態は、おそらく、その過程を実現する力の度合いによって特徴づけられるスペクトラムをもつ。そのスペクトラムをいくつかに切り取ることで、中動態の意味が区別されるのではないか。[187]

として、自動詞、自発、受動態、可能を区別する可能性に言及する。それらを、

> 「自然の勢い」すなわち力の実現を指示しているが、そこには度合いの差がある。[186]

と度合いとしてとらえている。

> たとえば、淡白な力の実現であれば、単なる自動詞表現がこれを担いうる。
> 非常に強い力がゆっくりと、しかし着実に過程を実現する場合には、いわゆる自発の意味として理解される。
> また、過程を実現する力と主語＝主体の間に明確な区別が見いだされる場合には受動態でこれを表現できる。
> その力の強さと結びつきが強調されれば、可能の意味が出てくる。[187]

この区別は、必ずしもすっきりイメージできるわけではないが、吉本隆明がすべての言葉を「自己表出」と「指示表出」の度合いとしてとらえているのと同じで、品詞分類などのカテゴリー分けとはそもそもの発想が違う。この「分類から度合いへ」が中動態の世界へ入っていく鍵であると思われる。

以上

追記　**2020年6月26日**

第三章「意志、ふたたび……」の節[97]を第六章現在から読み直すと、第三章を読んでいたときとは少し深度の違う興味深い見え方が現れる。今読むと、國分はかなり慎重な言葉遣いをしているように感じる。

意志、ふたたび……

われわらはいま、中動態の歴史と意味に迫りつつある。それゆえに、最初の問題へと戻ることができる。

能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させるものであった。われわれは中動態に注目することで、この対立の相対化を試みている。かつて存在した能動態と中動態の対立は、「する」と「される」の対立とは異なった位相にあるからだ。

そこでは主語が過程の外にあるか内にあるかが問われるのであって、意志は問題とならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、<u>意志が前景化しない</u>。

ここで大変興味深い事実に言及して次章へのつなぎとしよう。ハンナ・アレントが伝えている次の事実である。

> （略）アリストテレスは意志の実在を認識する必要がなかった。つまりギリシア人は、われわれが「行動の原動力」だと考えているものについての「言葉さえもっていない」のだ。[97-98]

具体的には、

・異なった位相にある。

同一の位相で、ある時期には一つがあり、別の時期にはそれが消滅し、別のなにかに置き換わるのではなく、そもそも「異なった位相にある」。ということは、2つが同時に存在していたかもしれない。一つの位相しか見えなければ、片方しか存在していないように思うが、実はそうではないという可能性を含んでいる。

・意志は問題とならない。

ここも「問題とならない」だけで、存在はしていた可能性がある。

・意志が前景化しない。

「前景化」というやや特殊な用語が使われている。その意味するところは、背景（後景）にあったということになる。埋没していた。焦点が合っていなかった。

以下はハンナ・アレントの言葉の引用部分から。國分自身の言葉ではないことに注意。若干ニュアンスが違う。

・意志の実在を認識する必要がなかった。

「実在していなかった」と単純に書いていないことの方に意味の重心があるように読める。つまり、実在していた（かもしれないが）が、認識しなければならない状況になかった。

・「言葉さえもっていない」

アレントの引用の中でさらにカギカッコに入っている。強調か、他の書物からの引用かはこれだけでは判断できない。バンヴェニストの「言語は思考の可能性の条件」という視野から観れば「言葉がない」ということは、思考の可能性の条件「さえ」ないということになる。國分がこの部分を引用したのは、アレントの鋭さとその鋭さゆえの行き過ぎを暗示しようとしているのかもしれない。

少なくとも、第三章の「意志、ふたたび……」節には、「当時の人間に意志と呼べるものは存在しなかった」という単純な記述は見当たらない。直前の「『中動態』という古語が残り続けなければならない」は、國分の言語に対する慎重な記述態度と通じる点があるように思う。

言葉と思考。心の動きと出来事の描写。自己表出。

言葉として存在しないことが、直ちに存在しないとは言えないのは当然のように思えるが、これは、言葉の無能さ・限界を指し示すと同時に、言葉というものの存在原理でもある。

僕たちが何かを体験した。その体験は素晴らしいもの、あるいは、ひどいもの、あるいはまた平凡なものだった。しかし、どのようなものであったか「言葉にすることが出来ない」「筆舌に尽くしがたい」「言葉にするとどこか違ってしまう」と思うことはよくある。ここで終われば、文字通り「言葉にならなかった」となる。多くの場合はこのようにして言葉というものの限界点を示して、その体験の痕跡に留まる。しかし、一部の例外的な場合、それでもなんとか表出しようとして、歩を進める。その手段は、ともかく自分が体験した出来事を述べることになる。出来事の描写である。そして、その述べたてたところの言葉を別の人間が受け取って、その体験を再現することで、「言葉にすることが出来なかった」はずのその「何か」を体験したと感じることができる場合がある。出来事の描写しか言葉になっていないにも関わらず、曰く言い難い感情や感覚や思考や、いわゆる心の動きのような、話し手の内部に生じたそれらの渾然一体と成った何かが、受け手にも発生する場合がある。言葉自体が「出来事の描写」しかなされていないからといって、そういった「言葉にならない」ものが存在しなかった、ということにはならない、という言ってみれば当たり前のことがここにある。

この「言葉にならない」もの、何かを指し示すことができないもの、であるにも関わらず、書き手にただならぬ何かを引き起こし、読み手にも感取されたそれそのものを吉本隆明は自己表出と呼んだ※。言葉というのは、その自己表出性が、ともかく何かを指し示すということそのものである指示表出性と交差し折り合うことで「言葉になる」。「言葉にできない」という沈黙は、多くの人たちにとっては言葉の限界であるが、別の人には言葉の可能性である。言葉の側から記述すれば「言葉にならない言葉にできない」その「ならなさ、できなさ」の抵抗的事態そのものが、言葉というものの支持体であり、言葉を存在させ変動させてきたと吉本は見ていた。

※語のレベル（文法レベル）で言えば、助詞などの、指示性が低くても、何かを引き起こすことができるものは自己表出性が高い語となる。